

東京女子高等師範學校
日本幼稚園協會

幼 兒 の 教 育

主 幹
倉 橋 惣 三

五 月 號

橋爪 健著 詩集

合掌の春

處女詩集
定價一圓二十錢
大正十一年刊

午前の愛撫

第二詩集
定價一圓八十錢
大正十二年刊

桃色の季節

薔薇詩集
第一卷
近刊

著者 日記

これらの詩集は私の甘酸ゆい抒情詩時代の紀念標である。忘れがたい學生々活の唇氣樓である。『合掌の春』を一高時代の夢のみの王國とすれば、『午前の愛撫』は大學時代の多少理念を混へた世界である。『桃色の季節』は少女詩集ともいふべきもので、私の裡のフラウエン・ゼーン(女性心情)が歌ひ出た遙かなる思慕の聲である。



育教の兒幼輯編會協園稚幼本日

會長 東京女子高等師範學校校長 茨木清次郎
 主幹 東京女子高等師範學校教授 倉橋惣三

贊助員 (五十音順)

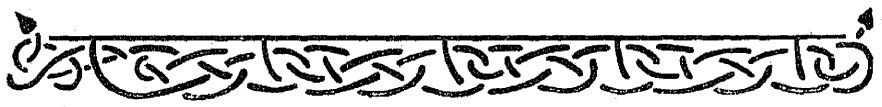
東京女子高師教授	乙竹岩雄	東洋大學教授	棚橋源太郎
東京帝大醫科講師	太田孝之	東京女子師範學校長	田子一民
東京高師教授	大瀬甚太郎	東京女子高師囑託	高島平三郎
慶應大學教授	唐澤光德	帝國教育會理事	龍山義亮
東洋幼稚園長	岸邊福雄	文部省社會教育課長	野口援太郎
早蕨幼稚園長	久留島武彦	京都帝大教授	乘杉嘉壽
帝國教育會會長	澤柳政太郎	東京女子高師教授	野上俊夫
東京市學務課長	佐々木吉三郎	東京女子高師教授	堀七藏
東京高師附屬小學校主事	佐々木秀一	東京帝大教授	文博 松村武雄
東京女子高師教授	下田次郎	東京女子高師校長	文博 松本亦太郎
東京女子高師教授文學士	菅原教造	奈良女子高師校長	文博 横山榮次
醫、文博	富士川游	奈良女高師附屬幼稚園主事	醫博 三田谷啓
東京市視學長	藤井利譽	日本女子大學學監	安井哲子
東京女子高師講師	藤五代策	東京高等學校長	湯原元一
大阪市教育局長	福士末之助	東京帝大教授	文博 吉田熊次





號二第 育教の兒幼 卷四十二第
次 目

此 の 春 倉 橋 生 蓋	長 編 お 小 説 春 東 京 女 子 高 等 師 範 學 校 教 授 岡 田 美 津 瓦	遊 戲 樂 譜 遊 戲 樂 譜	童 謡 遊 戲 ミ ほ せ ん ぼ 土 川 五 郎 毛	遊 戲 樂 譜 遊 戲 樂 譜	童 謡 遊 戲 鬼 さ ん 土 川 五 郎 蓋	自 發 活 動 ミ 目 的 活 動 東 京 女 子 高 等 師 範 學 校 教 授 倉 橋 惣 三 美	メ ル タ ル テ ス ト に 就 て 東 京 女 子 高 等 師 範 學 校 教 授 古 川 竹 三 兎
---	---	--	--	--	--	--	---



東京女子高等師範學校
附屬幼稚園保母兼教諭

坂内みつ子先生著

定價金壹圓八十錢
送料十三錢

子供の遊ばせ方

四六版美本 好評第六版

子遊

供せば

をる

ことは中々難しいが又愉快なものである。

幼児教育の理論と實際に精通した著者の、子供に對する遊ばせ方の研究書であります。學校でも家庭でも備ふべき良書として御勧めします。

次目

子供を遊ばせるといふ意義
子供を遊ばせるに大切な條件
子供の好む遊びの種類
子供の好む玩具の種類
玩具を選定する標準
子供を遊ばせる方法

室内遊び
團體遊び
個人的遊び
室外遊び

以數十項下

發行所

東京上野公園
寛永寺坂下

教文書院

院

電話下谷三〇四七番
振替東京四六一二一番

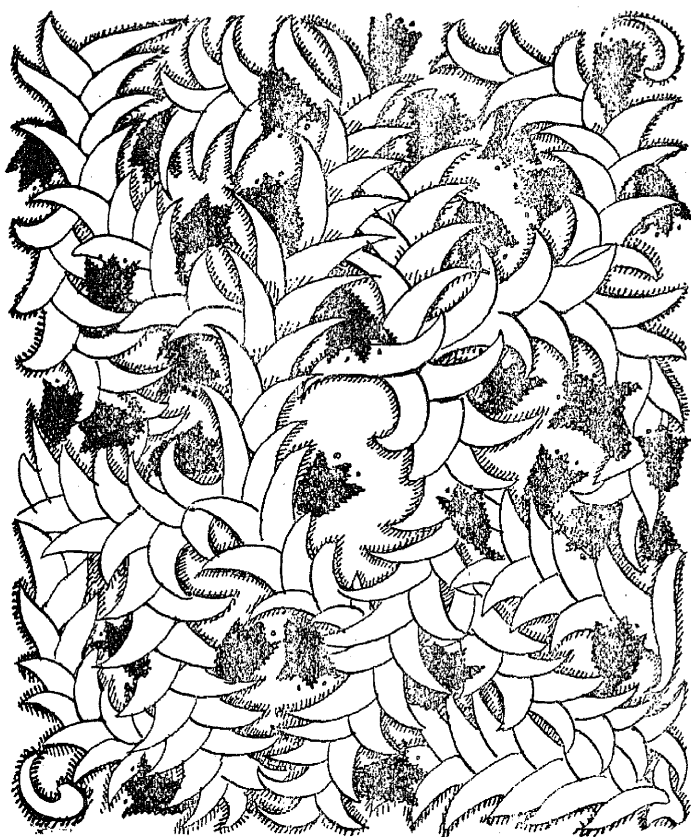
東京女子高等師範學校內

日本幼稚園協會

幼 兒 の 教 育

主 幹

倉 橋 惣 三



第 二 號

1942

第 二 十 四 卷

自發活動と目的活動

——保育原理の問題——

倉 橋 惣 三

此自發活動及び目的活動と云ふ言葉を以て現されて居りますものは随分色々な意味に使はれるのであります。併し此處では豫め一つ御約束をいたしまして、之を精神活動の形式方面の問題として取扱つて見たい。勿論有ゆる形式は何等かの内容なしに存在するものでありませぬからして、實際に現れて來た所に於ては精神活動の形式だけのものと云ふものがある筈はないのでありますけれども、問題の考究としては如何なることが子供に依つて自發されて居るか、如何なる内容の目的生活が行はれて居るかと云ふ其内容的實質的價値の問題と離れまして、只其精神活動が自發的であるか、目的的であるか云ふやうな純形式的の意味に於て取扱つて見ませう。是は研究上の便宜上の御約束であります。其二つの中でも自發活動と云ふ方面に於きましては其由つて起りました色々の由來を尋ねて見ますと云ふと、可なり生活活動の形式よりも内容と云ふものに結付いて其ことが考へられて居る場合が多いのであります。例へば自發活動と云ふ言葉を我々が使ひますと云ふと教育學史的に必ず一人の代表としてフレーベルを想出するのでありますが、フレーベルの云つて居ります所謂自己活動と云ふものはフレーベルの考に従ひますと云ふと、總ての子供は其生れながらの自然の本來性の中に所謂神性を持つて居りまして、其神性は盡く眞なる美なる誠なるものである。それを自らの力に依つて發動して來る所に自己活動と云ふものがある。フレーベルは斯う云つて居るのです。フレーベルにござりまして自己活動の尊重せられて居る大きな理由は

子供が其本來性に於て神性を持つて居る、それが自ら現れて来る、謂はゞ内容的の意味を以ての言葉であります。

其フレーベルの考を受継ぎまして、或は自己活動、或は自發活動と云ふやうな言葉を使ひます時に、多くの人が其精神活動が形式として自發的であると云ふことと、それが何を自發するから尊いのであるかと云ふことと、詰り内容と形式とを往々にして取混せて用ひて居るのであります。ところで、フレーベルなどに依つて云はれて居ります自己活動の實質的價値の方面は、それも我々として決して無用な問題ではないのであります。それは暫く別にして置いて、今日の第一の問題としては、其内容的方面を盡く切離しまして、純形式的の問題として之を考へたいのです。之だけのことを豫め判然御約束をして置きたいのであります。其精神活動の形式としての考究と内容の價値と云ふことが混雜いたしますと云ふと問題が甚だ曖昧なものになる。又往々にして其曖昧な論議が世の中に行はれて居るやうでありますからして、其判然した區別を此處に御約束をして置きます。

さう云ふ風な御約束の下に、所謂其自發活動と云ふものは何であらうかと云ふ第一の問題が出て来るのであります。便宜上先きに定義のやうな形を一つ假に拵へて置きます。後で壞れるか知れませぬが先きに拵へて見ます。云ふと、所謂自發活動と云ふものは有ゆる活動それ自身の自發力に依つて現れて来るもの。斯う云ふ風に假に定義して置きたい。之を言ひ換へて見ますならば、當該活動が持つて居りますそれ自體の自發力以外の力に依つて助けられて居ないものと云ふことになるのであります。消極的に裏から云つた譯であります。當該活動が持つて居ります。そこで、此の言現し方の中に依つて助けられて居ないもの、斯う云ふ風に考へて置いて見やうと思ふのであります。そこで、此の言現し方の中にあります「當該活動が持つて居る自發力以外の力」、所謂「以外の力」と云ふのが何であるか云ふことを少し考へて見ますと、是が大きく分けて二つに別れるやうであります。

此處に色々自發活動の面倒な問題が別れて来るのであります。一つは兒童の自身以外の力でありまして、例へば教師

の命令に依つて或る活動を子供が行つたさしますならば、是は兒童以外の力、即ち教師の力に依つて助けられ、或は誘はれて居る所の活動でありまして、明かに自發活動と云ふことは出来ない。所がもう一つ心理的に考へました場合に於て、特に子供の自發活動と云はずして、當該活動の自體の自發力と申します所から考へて見ますと、同じく兒童の中にある力ではありますけれども、決して當該活動内のものでない。即ち兒童の中にあります力ではありますけれども、其當該活動以外の活動に依つて誘はれた、或は引出された場合に於ては此當該活動に對しては自發的でなかつたと云はなくてはならぬ。子供の營む活動は連續的に或は無連續的に無限なものでありまして、A活動あり、N活動あり、或はO活動あり、必ずしもABODと続きませぬ。此A活動は子供以外の力に依つては動かされて居るのではありませぬけれども、併し他の活動に依つて是が促されたとしたならばA活動其ものに取つては自發的でなかつたと云はなくてはならぬ。一般に子供の自發活動と云ふことを云ふ時に考へられて居る常識的の考へとしては、こうまで言はなくともいゝ様ですが、併し心理學的に嚴密に考へ、少くも考究の順序としてはそこまで細かに分けて置くの必要がある。例へば子供の前に菓子が置いてある、此御菓子を上けるからして歌を一つ唱つて御覽。其時に歌を唱ふと云ふ活動は必ずしも他人から強ひられた活動ではないかも知れぬ。菓子が欲しいと云ふのでありますからして、只歌を唱へよと命ぜられた場合とは大いに趣を異にして居ります。其歌を唱ふのは菓子を欲しいと云ふ活動に依つて促された活動でありまして、其歌を唱ふこととそれ自身は決して自發活動ぢやない。即ち、全體としては他律活動ではなくして自發活動のやうに見えますけれども、併し歌を唱つたさ云ふ其當該活動はそれは菓子が欲しいと云ふ他の活動から引出されたのである。

餘計な穿鑿のやうでありますが斯う分けて置くことが極く必要のやうであります。實際の場合に於きましては、其菓子欲が欲しいと云ふこと、歌を唱ふと云ふことが今此處で私の取扱ふ程に判然區別された活動でない場合も幾らもある。殊にあの小さな、まだ總てが意識的に反省的になつて居りませぬ子供に於ては其歌を歌ふと云ふことも亦或る種の自發興味

がそこに加つて居りまして、菓子欲しいと云ふことと歌を唱ふと云ふことが別に二つの活動でない、斯の如く繋がり合つて仕舞つて居ると云ふやうな場合が、殊に幼い子供に於ては多いだらうと思ひます。のみならず菓子欲しいと云ふ活動に依つて惹起された、歌を唱ふと云ふ活動でありますけれども、歌を唱ふこと自身が子供に取つては相當に自發的な性質を持つて居るものであつた場合に於ては、是は何もさう妙に區別をしなくても宜いやうな場合も實際ある。けれども假に極めて極端な場合を此處に假想して見ますと、歌を唱ふと云ふことに付ては、何らの當該活動自體の自發力と云ふやうな名を附くべきものがないが菓子が欲しいと云ふ方は實に當該活動自體の自發力を持つて居つたものであれば、いや／＼歌を唱ふと同じこともあつて宜いのであります。又幾らもあると思ふのであります。さう云ふ場合に於て自發活動と云ふものは子供の生活活動の内的關係に於てもよく考究して區別して考へて置かなくちやならぬと云ふ風に思ふのであります。

そこまで嚴密に區別をしたとして、また其上に此處で考へて見なくちやならぬことがある。當該活動自體の自發力と云ふことを何の穿鑿もなしに此處に云つて仕舞つて居るけれども、併し純理論的に考へてそんなものが本當にあるであらうかどうかと云ふ問題も此處に當然起つて來る穿鑿であります。或る考へ方に依りますと云ふと、總ての精神活動と云ふものは其由つて動いて來る所の内部的潜在性を持つて居る。併しそれが實活動となつて外に現れて來る爲には何かの外部的誘因と云ふものがそこになければならぬものである。斯う云ふことは一般の精神活動の心理的特性として考へられる。菓子が食べたいと云ふことは食欲から起りました所の活動でありませうけれども、自發力で考へた、食べた方が宜いと考へた結果ではないので、自ら只食べたくなつたのでありますけれども、併しそれは食べたくなること云ふ潜在内在活動がそれ自身のに出て來たものであるのか、或はそこに菓子と云ふものが其刺激となつて、即ち菓子あるが故に初めて現實的活動となつて出たものであるかと云ふことは、そこは甚だ難かしい問題になつて來るのであります。

學校に來ました子供が何だか非常な興味を以て繪を畫き出した。何を畫けとも云はない。手本も與へない。自由畫に於て綺麗なダリヤを畫き出した。此ダリヤを畫くと云ふことは所謂自由畫と云ふ大體論に於きましては自發活動的のものであります。併し其ダリヤを畫く所以のものは其朝學校に來る途中でダリヤを何處かで見たと云ふことが大きな原因になつて居る。其點を強めて考へれば矢張外部の刺激或は外部の動力云ふものが大きな働をして居ると云ふことであるかも知れない。すなはち、内部的潜在的動力と云ふものは心理學的抽象的の言葉としては考へられますけれども、實際に於てはそれが何處までそれ自身だけで出て來るかと云ふ問題は甚だ難かしくなつて來るのであります。殊にあの自發力と云ふものを非常に力説して居りますフレーベルなどが使つて居る言葉を一つ此處に例として持つて來ますと云ふと、フレーベルの言葉の中に所謂自己活動と云ふものはそれ自身で外に現れて來やうとする所のインパルスである。衝動であると云ふことを云つて居ります。ところで恐らく我々の持つて居ります心理學上のターム、言葉の中で一番純粹、内在的の活動性を持つて居るものは衝動でありませう。意志とかと云ふやうなものは、是は極めて複雑な、従つて外部動力と關係を持つたものであります。衝動と云ふ言葉を使ふ時に於ては最も純粹な内在的活動力を持つて居る言葉として取扱はれる。生れて直ぐの赤ん坊、それも既に衝動を持つ。或は殆ど意識を持つて居ない時の生活に於ても衝動的に或る種の活動が起ると云ふやうな使ひ方は、詰り其衝動と云ふ言葉を其最も代表的の意味に使はうとして居るのであります。ところが又もう少し細かに見て行きますと云ふと、心理學の云ふ所に依れば、あらゆる衝動云ふものも矢張外部の刺激なしに起るものではないと云ふことは云はれる。其現れた所を見て居りますと云ふと、それ程取立てゝ原因とするに足りないやうな刺激であるのか知れませぬが、心理的に云へば矢張何等かの外部刺激と云ふものがなければ、衝動そのものも雖も現れて來ない。斯う云ふやうな、純自發的な衝動と云ふ言葉を使つた場合でもさう云ふことが云へるとしますならば、漠然たる自發能力と云ふやうな言葉を云つた時に、精神活動全體を含めた自發活動と云ふ様な言葉を使つた時に、それが果して何處ま

で純内在的潜在的力だけで動いて来るものか或は我々が気が付かない所に、気が付かないだけであつて、實は大いに外部動力が働いて居るか、そこは甚だ難かしい問題になります。此問題は此處で其問題自身を追究して突き留める必要がないのでありまして、斯う云ふ問題が片方に有得るを云ふことを頭の隅に置くことで以て止めて置きます。

兎に角自發活動を云ふものを、さう云ふ風な考察の下に置いて見ますと云ふと、其自發活動と云ふことの自發活動たる本當の意義と云ふものは、生活活動の出發點に關する問題であるを云ふことが、上來述べた所で大體考へられて來ることなのであります。少くもあらゆる自發活動に關する論議の中に、其自發活動をそれ自身としては結果の概念と云ふものは這入つて來ないのであります。すべて、活動と云つた所で、ちよつと起つて、ちよつと消えるものではなく、多少の繼續を持つて居るものであります。其繼續の内容過程と云ふものを考へて見ます。總ての活動は出發點と、それが通つて行きます過程と到達します結果と此三點に於て考へられるのであります。總ての活動は出發點と、それが通つて行かない言葉であつて、過程に付いて少しも關係して居ない言葉であつて、出發點だけに付いて云つて居る言葉であります。斯う云ふことはまあ一つの確定的のものとして宜からうかと思ひます。此點も自發活動とか自己活動などと云ふ言葉が使はれます時に可なりはつきりして置くべきことであります。

自發活動と云ふことを申します時に、其具體的實際的の例として子供の生活の中に幾らもある譯でありませうが、多少纏つたものとして擧げられて來るものは遊戯であります。必ずしも遊戯ばかりが自發活動ぢやないのであります。子供の所謂實際生活の上にも亦自發的に幾らも當んで居るものでありませうが、併し普通に自發活動の模範的の具體例として遊戯と云ふものを多く擧げて來る。フレーベルが遊戯と云ふものを教育上非常に價値あるものとして考へた、それも矢張自發活動の具體的表現として遊戯を取扱つて居ると云ふことに他ならないのであります。フレーベルが幼稚園を云ふ言葉を發明しない時に、其場所に名付けて居つた言葉は「幼兒の自發活動を尊重して遊戯に依つて教育する場所」と云ふ

名前でした。キンドルガルテン云ふ言葉は後になつてフレイベルが苦心の結果思付いた言葉でありまして、其初に、あのブランケンブルヒに初めた事業なるものは、幼児の自發活動を尊重して遊戯に依つて教育する場所と云ふ名前で始められたのです、是は詰りフレイベルに於て自發活動云遊戯云ふものが如何に密に結付いて居るものであるか云ふことの證明になるのでありませう。

所が遊戯云ふものは今日我々の知つて居る所に依りますれば極めて複雑なものであつて、極めて繼續の長いものであつて、決して初から仕舞まで自發活動だけで行くものではない。若しも初から仕舞まで自發活動だけで行くものが遊戯であるさしますならば、遊戯の途中に於て子供が遊び方を學ぶと云ふやうな問題は何處にも置場のない問題になつて來るのであります。すなはち今日我々の考へる遊戯に於てはさう云ふ複雑な意味を含めて之を考へて居る。併しフレイベルが何故遊戯と云ふものを特に自發活動の最も典型的具體例としたか云へば、其遊戯活動の出發點が自發的である云ふことに他ならないのです。遊戯は自發活動である、だから偉いものであると云ふ、「だから」云ふ言葉の中に極めて疎漫な色々のものが含まれて居るのであります、遊戯が此意味に於て獨自の性質を持つて來るのは、其出發點に於て云はれて居るのです。遊戯と云ふ問題に付ては御承知のやうにフレイベルは教育的であります、純心理的に遊戯を解釋しやうとする人が幾らもありませう。其遊戯云ふものを特に心理學上の問題として取扱はう云ふ所以は、詰り子供の遊戯が實際生活、殊に大人の生活と比べて何だか違つて居る云ふ所を氣が付きまして、其何だか違つて居ると云ふ、何だかを突止めて見たい。其説明概念を見出したい云ふ所から種々な遊戯論と云ふものが學者に依つて試みられる。其例へば一つ、例のスペンサー或は詩人シルレルなんかの名に依つて行はれて居ります勢力過剩説、——遊戯と云ふものは子供の持つて居る勢力の過剩であるといふ様な説で、何故勢力過剩などと云ふやうな問題を以て遊戯其ものを説明しようかとしたか云へば、詰り何故遊戯云ふものが其出發點に於て自發的に出て來るか云ふそこを見て、人から強ひられたのぢや

ない、厭々して居るのぢやない、結果を考へて打算的にするのでもない、自らと云ふ所を過剰勢力によるものだと説明しようとしたものを見るこゝが出来るのであります。或は此の説に對して全然反對の位置に立つて居る説に、グロースの本能説とでも云ふものがあります。其本能説と云ふものは勢力過剰説が取つて居りました純機械的の説明に對して、本能云ふ非常に内容を持つた言葉を使つて來たのでありますからして、そこにグロースの考が前の説よりも非常に發展をして居るのであります。けれども併し本能と云ふ言葉を特にグロースが取用ひた所以は何故かといふと、矢張出發點に於て自發的であり自然的であるからです。

何故自然に子供が遊ぶか、それは本能の結果であるといふのは、其の自發的出發點を説明したい爲である。最近に又此グロースの考に對して、此點ではありませぬが、寧ろグロースの取つて居る内容に關する色々の方面に對して、反對に立つて居るスタンレーホールの遺傳的動的習慣説といふのがある。その考も、内容に於ては實に色々の問題が出て來るのであります。遺傳的動的習慣と云ふ字を特に頭に用ひて居る所以は、スタンレーホールが遊戯を見るに其出發點に於て他の生活と特色が違つて居ると云ふ所に著眼して居ると云ふことなるのであります。是等の色々の人の考へ方などを参照して見ましても、自發活動と云ふものは色々の生活活動の其出發點に關する問題であると云ふことを云つて宜からうと思ひます。

さて、我々の普通の生活に於ては出發點よりも結果を主體とするのが普通であります。又結果をのみ主にする功利的考に反對する處の、例へば其生活活動その物を主にする一種の美的生活、過程そのものに價値を置くと云ふやうな問題も其處に起つて來る。併しながら所謂其自發と云ふ概念を教育の中で我々が取扱ふ時に、何故其精神活動の出發點に關する問題を、そんなに大騒ぎするのであるか、といふ問題が先づ起つて來べきでせう。

自發活動と云ふことの心理的説明は先づ只今申上げたやうなことで打切るとしまして、それを教育論の中で教育者が頻

りに尊重する所以、言換へれば、精神活動の結果でもなく、精神生活の過程でもなく、其出發點に關する特色を何故そんなに大騒して尊重するのでせうか。教育は勿論結果を豫期して居るものである。方法論上の如何なる説が出たとしまして、結果と過程なしには教育と云ふものが我々に意義あるものでないのであります、それにも拘らず活動の出發點と云ふ所に於て意義のある自發と云ふことを、何故そんなに尊重するのかと云ふことは、是は大いに考へるべき問題でありませう。

その答へとしては、先づ、何だか自發と云ふことが詩的な言葉である。窮窟でない。自由なやうな暢としたやうな又當世的な或る響を持つた言葉でありますから、何となく迎へられるやうな點をもつて居るのですが、只それだけならば、是は問題ぢやありません。併しながら、それを追究して其實質を見極めて、我々が自發と云ふ言葉を使ふとすれば、何故結果を従的にして、さう云ふ活動の出發點に關してのみ大騒するかと云ふ此問題は、大いに考へなくちやならぬ問題と思ひます。そこに於て自發活動と云ふものが正當なる教育上に於ける位置を見出し得るか見出し得ないかの分れ目になつて來ると思ひます。或る見方からすれば、兒童が自發活動を持つて居る。此の自發活動的本性を持つて居ると云ふことは、良きも悪しきもない。只自然であると云へばそれだけのことであります。良いからするのぢやない、悪いと云つたつて止めることが出來ない。と斯うも考へられないこともない。それでサイコロジイの研究は、そこで止つて仕舞ふのであります。教育の方は自由に人間の活動を選択し支配する親切な權利を持つて言ふに拘らず、何故之をそんなに大騒するか。

是は色々の考へ方で、解釋が出來ると思ひますが、その一つとして是は反動に過ぎないと云ふことが出來ます。過ぎないこと云ふことは自發活動それ自身の價値に何ら輕蔑した意味を持つて居りますのではありませぬ。自發活動を考へ出した、其自發活動と云ふものを大層尊重し出した其所以が教育者の本當の新發見に基くのであるか、或は反動に依るものであるかと考へて見た丈のことです。例へば此自發活動論者の代表者としてフレーベルをもう一度引いて來ると

しますならば、此問題はあの人の教育の根本概念として、特に自發活動と云ふものを尊重し、折角自分の考に依つて建てましたものに學校といふ名を附けることを頗るに拒みまして、自發活動を尊重して遊戯に依つて教育すると云ふやうなそんな名前を附けた所以は、詰り何か、即ち當時の學校教育法を云ふものに對して極度の反感を持つて居つた爲であります。何故フレーベルの持つて居る當時の教育改造の意見と云ふものを其時フレーベルが強く感じたかと云へば、當時フレーベルの周圍に行はれて居りました學校教育法に對する反動反感に他なりません。それもあんなことではいけないと、心理學的に見れば實に何でもありません。當然である。心理學的研究を以て子供を見るものは子さの自發性は誰も直ぐ氣が付く。そんなに大騒しなくても宜い。此自發活動を自分の學說の根底にまで引上げて來たことは是はたしかに反動に依るところもあつたのであります。

其フレーベルをして反動の感を起さしめた其當時の學校教育法は何であるかと云へば、一口に云へば極度の他律的教育方法であつた。言換れば自發活動と云ふものを少しも認めなかつた生活である。言換れば、總ての兒童の活動の結果だけを考へて、其出發點に於て何らの考慮を拂はなかつた教育法である。さう云ふ風に云へるのであります。それもどうも子供の自發活動を尊重しないであんなことをして居る、可哀想だと云ふやうなセンチメンタルの問題ではありませぬ。子供に優しくしてやると云つたやうなそんな情愛的の問題でもない。精神活動の結果のみを取扱つて其出發點にある意義を見出さないことが合理的でない間違つて居るのであるといふのです。そこで逆に出て、結果よりも出發點に重きを置く、フレーベルの學說が出来たものと、斯う解釋が出来ると思ひます。

所謂フレーベルの考其ものとは違つて居りますけれども、さう云ふ風な教育主張の傾向の中に屬すると考へて差支へない所の所謂今日の自動主義教育と云ふものも、要するに矢張生活活動の出發點の自動的な所に重きを置いて居るのであります。斯う云ふ風に考へまして、其次に起つて來ることは、其出發點に重きを置いて、過程及び結果の如何を問題外に

置く其自發活動と云ふものが、兒童生活の全體の教育的働きとしてどんな風に動いて來るものだらうか、斯う云ふ問題が起つて來るのであります。詩人が子供を歌つて居る、見よ、子供の自由にして自發的なるをと、子供が自發的に外から何ら強制されるのでなく、結果に依つて促されるのでなく、過程の考慮もなく、只出發點から出發點へと蝶の如く飛んで居る、そこが、大人の生活に比して、いふにいへなく面白いといふのは、それは詩人的の見方であります。併し教育者が子供を見る時に其詩人的の見方も非常に必要なことでありませうけれども、教育は歌つて終るべきものぢやない。其歌ひたくなる美はしいあの自發性と云ふものが全體の教育的作用の中に於ては、どんな働をして呉れるものか、我々が計畫して命令して、設備してするならば、元來が教育の爲に考へたことでもありますからして、それが教育作用の中にどんな位地を持つかと云ふことは、誰でも分つて居るに相違ない、併し活動の出發點だけに於て意義を見出した自發活動と云ふものを、しかも詩に歌ふだけでなくして、面白がるだけでなく、それを一つどう教育に於て行つて行くかと云ふことが、教育者に、さう云ふことが出来る爲に教育作用全體の中にそれがどんな働をして呉れると云ふ判然した安心か確信がなければならぬ譯であります。

若し本當に子供の自發活動を歌の如く見て、それを直ぐに眺めて、自動主義教育を取つた人があつたさすれば其詩人の心持は非常に尊敬しますけれども、教育者としては甚だ足りないと言はなくちやならぬ。そこで其自動主義教育論（或は斯う云ふ新教育學說の名前を挙げますと、それを舉げて居る人を聯想いたしますが、私が此處で聯想します其人よりも恐らく其説は大きなものだらうと思ひますから、誰の説と云ふやうなことを此處では別にいたして置きます。）といふ様なことをいふ現代教育論者の中にある其詩人的教育論と云ふものが、自發性と云ふものをどう考へて居るか考へて見たい。ところで、斯うではないかと思ふのは、自發的出發それ自身は生活活動の形式でありますからして、それに良いも悪いもない、それも、フレーベルの様に、兒童の持つて居る神性を自發して來ると云ふやうに、内容を入れてありますならば、之

に價值が生まれ、御約束した如く、今日の此考究に於ては内容方面を切離して居りますから、自發的出發それ自身には何らの價值もない、只自然だと云ふ外ありません。而もそれを教育の考察の一つの根本として見て行きますのは、子どもが其自發的出發點に依つてぎん／＼動いて行きます間に、其活動の過程、所謂生活過程の間に於て、大自然が執つて居ります發達原理に忠實に信頼して居ると云ふ以外にないと思ひます。

自然と云ふものは他の力を以てさうするのではないので、或は宗教的には他の力が働いて居るか知れませぬが、自然それ自身の問題としては他からどうするのでもないのです、あの通りに發達をして來た、又して居る、其自然の取りました發達原理と云ふものに忠實に従ふ爲には、なまじ出發點に於て人間的小細工をしないで、自然のままの出發をさせるのが適當なことであらうと斯う考へる。出發點を人間的にして置いて後は自然がされる發達原理に従はうと云つても、是はなかく、難かしいことでもあります。所謂二股の心持になる。自然が取れる經過と云ふものに我々が信頼するものがあるとするならば、出發點も又自然的な出發點に従はなければならぬと云ふことになるのであります。(つゞく)

メンタルテストに就て

東京女子高等師範學校教授 古川 竹二

四八

序

メンタルテストが流行る。メンタルテスト云ふ言葉は、新聞にも雑誌にも到る處に見出される、然らばメンタルテストは如何なものであらうか。或る人は私にメンタルテストをする云つて次の様な問を出した。

幾里四方もある草深い野原のまん中に兵士が五十人ばかり北を向いて一列に並んで居た。そして前方一帯に火事が起つて折から北風にあふられて、如何に走つても逃げのびることの出来ない程の早さで迫つて來た。この場合に如何したら火を逃れることが出来るか。

云ふのである。その人は斯かるものがメンタルテストだと思つて居た。又數年前に何處かの師範學校の附屬小學校の入學試験にメンタルテスト云つて、あなたの家は何

處か」云いた時、子供は「直ぐそこです」云答へたのが駄目だ云つて、不合格にしたと聞いた。メンタルテストでは左様な答へはいけないのだらうか。

多くの人の中の一部にしかならない教育家の、その中で誠に少數の専門家を除いた世の中の多くの人は、メンタルテストを頓智とか氣轉さでも云ふ可きものを試験することさ考へて居るか、或は幾分かこの方面の書を讀んだ人でも、豫想された答へを得なければいけないものと思つて居る人が多いことを私は知つて居る。ハーン氏の神秘に依らなくとも人は、姿としては只一人であらうとも、その人の身體を變を、形成するに幾百千の人と、幾萬年の時を要して居る。それほどに複雑な、神秘的な人を左様に忽に扱つては濟まない。

無論我々人間の考へることに限りがある。思考の法則を研究し眞の智識を得るの道を読む論理學者でさへ、絶對不變の眞に就いては語るを避けて居る。その様に多くの心理學者が長い間の實驗と思考とに依つて案出したメンタルテストと云へども未だ批評の餘地なしとは云へぬ。完全は人の力が及ぶ處ではない。

一、メンタルテストの由來及び區別

然らばこのメンタルテストは如何して出來たのであらうか。今から凡そ六十年前のこと、英國の遺傳學者ゴルトンが人の智力は或る標準を設けるこゝ、それによつて分類することが出来るこゝ云つたのに暗示されて、その言葉が今日著々實現される様になつて來た。最初にそれを實際に試みたのはフランスの心理學者ビネー及びシモンの兩人である。

この人々は十五年と云ふ長い間の努力の結果一九〇八年にビネーシモンの智能尺度(Binet-Simon Intelligence Scale)と云ふメンタルテストの一系統を作りあげたのである。之は三才から十五才までの多數の子供に試験をしてその年齢のものがこれだけは出来るこゝ云ふ問題を四か五つ宛選んだも

のである。

その後之等の問題は同人に依つても又バートやターマンやなどに依つて訂正をされて居る、本誌が幼稚園時代の子供を對象とするものである故に、幼稚園へ入る頃の子供に課する問題を擧げて見るこゝ

○數字を三つ云つてそれを眞似させる、

○五つ位の言葉から成る文を云つて眞似させる、

○鋼貨を四つばかり並べてそれを數へさせる、

○左右に美しい人醜い人の並んだ繪を與へて何れが美
くしいかを答へさせる、

○五寸か六寸位の線を書いたものを見せて何れが長いか
短いかを答へさせる、

○年齢をきく、

○紙を與へ、三寸に四寸位の長方形の繪を與へそれを見
て畫かせる、

○赤、黄、青、などの色紙を見せてその色の名を答へさ
せる、

○一方の手の指の數をかぞへさせる、

まだ學者に依つていろ／＼であるが大體右のやうなものである次にメンタルテストは個人検査と團體検査とに區別するこゝが出来来る。

個人検査と云ふのは一人一人を呼んで幾らかの問題を尋ねるのを云ふのである。即ち前に云つた様な或る年齢のものに、その年齢に適する問題を出して答へさせるのであるこの方法を行ふのは時間に制限のない場合、例へば一日とか半日さかに行つて仕舞はなければならぬと云ふ様なこゝのなき場合や、入學試験に少ない人數を試験する場合及び筆答するこゝの出来ない幼児などを試験するに適する。即ち幼稚園や小學校の入學試験などに適して居る。

團體検査は個人検査の場合に擧げた場合と反対な場合に用ゐるものである。それで中學校や高等女學校などの入學試験に於て今日大いに用ゐられて居る。この團體検査は個人検査が不可能な場合に用ゐる様に工夫せられたのであつて、メンタルテストの最も盛に行はれて居るアメリカ心理學者や教育學者のターマンやホイップル。ソーンダイク。オーチス。ハガティなきに依つて工夫せられたのである。

我國に於て用ゐられて居るのは之等の人々の工夫に暗示されて居る處が多い。

二、我國の中等學校にメンタルテストが

應用される理由

今日我國に於て中學校や高等女學校の志願者が募集人員に對して餘りに多數である爲めに種々の弊害を生じた。即ち(一)未だ發育の途中にある少年少女が試験準備に心身を勞するこゝの甚だしき爲めに、その發育を害されるこゝ。

(二)試験準備盛なる結果、元來推理の學科なる算術に至るまで鶴龜算の式や、仕事の問題の式や、時計の問題の式やに分類され、その式を暗誦して、それによつて答を出すに急にして、その式に至る推理をなさず數學の暗誦にて解くまでになつて來て居ること。(三)その結果として優秀者を撰抜するを目的とする入學試験の結果に、過然と云ふものを多く見られるこゝ、即ち入學席順が入學後大いに變化を生ずること、等は何人も經驗する憂ふ可き傾向を生じて來たのである。

然るにメンタルテストに依る時には、之等の弊害は大い

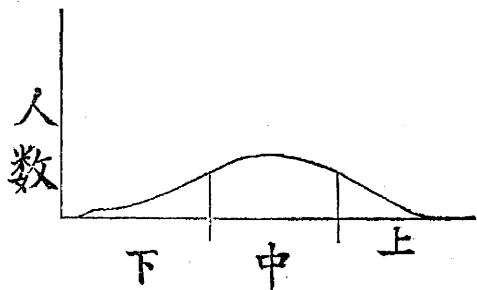
に除かれる。即ち

(一) メンタルテストは後に説くやうに準備を必要としないし又準備することも出来ない故に、準備に依る弊害は除かれるのである。メンタルテストに反対する者は、メンタルテストも亦準備により効果ある故に、この弊害は除く能はずと主張するけれども、準備に依りて受くるメンタルテストの効果の信するに足らざることは、幾分かの経験の有する私は十分に斷言することが出来る。若し準備が大いに効果を擧ぐるメンタルテストの問題あらばそれは不適當なる問題と云つて宜しいのである。

(二) 推理の試験は種々の形式を以つて行はるゝ爲めに公式などに分類することは不可能である。

(三) 以上のことから偶然と云ふことが遙かに減ぜられる。即ち入學試験の席順と入學後の席順とが密接なる關係を有つて居る。

以上の外にメンタルテストの成績に依つて多人數の智力を示す時には必らず下圖の如き形となつて現はれる。即ち中の智力を有する者最も多く、之を中心として上に行く



タルテストの成績を示すと次のやうであつた。

國語	二六一名	六〇點——八〇點
算術	一九二名	七〇點——九〇點
メンタルテスト	二四五名	五〇點——六〇點

(一〇〇點を滿點とす)

此の表に見る如くに國語の得點數は半數以上六〇點より八〇點を得て居る。算術に至つては更に宜しく半數に近きものが七〇點より九〇點を得て居る。之を見る時には準備

下に行くも次第に減じその割合は殆んど同じき數を示すのである。而して學科によつて入學試験をなす場合には甚だ趣きを異にする。

今實例を擧げて云ふならば大正十一年に施行した東京女高師附屬高女の入學試験に於て、志願者總數四七〇名の中國語、算術及びメン

教育に依つて半數を占むる多數の人々は十分の七乃至八までは得點するこゝが出来ることゝ示して居る。然るにメンタルテストを見るに半數以上の者が、中央に近き點數を得て居る。何れのメンタルテストの成績表を見るも殆んどこの現象を見るを常とし、加ふるに、國語及び算術等と異なり何等準備せざりしものなるが故に、ガルトンの豫言の如く人智の分布は之に依つて示されて居ることを語るのである。

更にメンタルテストが優秀者撰抜の方法として學科試験に勝れる點は、前述の如く學科試験にて入學せる席次が、入學後に大なる變化を來すに反してメンタルテストによつて定めたる席次が變化大いに少なきことである私は次に數字上に於てこの問題を證明しやう。

之を證明するにあつて専門以外の者が理解して居なければならぬ事柄が存する。それは二つのものを比較する場合に、その類似の度を示す數學上の公式である。それは

英國の學者スピヤマンの工夫せる公式である。

$$r = 1 - \frac{6e(D^2)}{N(N^2 - 1)}$$

r は比較せんとする兩者の相關係數

N は人數

D は兩者の席次の差

$e(D^2)$ は D^2 を加へたる總和

この式は後にピヤスンによつて

$$r = 2 \sin\left(\frac{\pi}{6} \rho\right), \quad \rho = 1 - \frac{6e(D^2)}{N(N^2 - 1)}$$

と訂正されたが我々が實際に結果を出す上に、何れの式を用ゐるも大差なきが故に比較的簡單なる前者を用ゐる方が便利である。而して此の式に於て比較さるゝ兩者の相關が完全である場合には $+1$ となり、それ等が全然反對であり即ち消極的に完全に相關する場合には -1 となり、全然相關係なき時には 0 となる。更に r 即ち相關係數の信頼の度を見るには次の公式を必要とする。

$$P.E. = \frac{0.7063}{\sqrt{N}} (1 - r^2)$$

P.E. は Probable Error 即ち蓋然錯誤、

若しこの r が 即ち蓋然錯誤が r の三分の一以下である場合には、比較さるゝ兩者は、關係深く、その深さの度は P.E. の小なるほど密接である。私は次に實例を取つて之をこの式の解き方を説明しやう。

今地理と歴史との試験をなしこの兩者の成績の關係を調べてやうとする場合を假定する。

	D^2	兩者ノ 差 D	歴史ノ 成績順	地理ノ 成績順
山口	0	0	1	1
田山	0	0	2	2
花田	1	1	4	3
春山	2	2	6	4
阪本	4	2	3	5
西本	1	1	5	6
山本	1	1	8	7
前田	1	1	9	8
吉田	4	2	7	9
9 名	15			

$N=9$

$\epsilon(D^2)=15$

$$r = 1 - \frac{6 \times 15}{720} = 0.87$$

この r を P.E. の式に代入

$$P.E. = \frac{0.7063}{3} (1 - 0.87^2) = 0.06$$

P.E. の結果即ち 〇・〇六は r の 〇・八七に比するに三分の一よりは遙かに小なるが故に、此の例によつて地理と歴史とは密接なる關係を有するものである。

以上の仕方に依つて行はれた結果の二三を次に述べて見る。

大正八年東京高師附屬中學の學科による入學試験の結果と一年後の成績とを比較したものをみると、即ち

國語、作文、算術の平均と一年後のそれ等の平均に依る成績順との關係係數 (r) は 〇・一六であつた。又大正五年入學生の入學試験の成績順と四年後の同じ科目による成績順との關係係數 (r) は 〇・一九であり。又東京女高師附屬高女の 大正六年入學生の入學試験の成績順と、二年後の同學科目による成績順位との關係は 〇・一六である、之等の結果を見る時は學科による入學試験が入學後變化甚だしく、極言すれば優秀者の順位によつて入學せしむ可き入學試験の目的は何等達せられて居ないこととなるのである。

然らばメンタルテストに依りし成績は如何と云ふに、東京女高師附屬高女大正七年の入學者に試みたるメンタルテ

ストの成績順位と一年後の成績順位の相関係は〇・五四で

あり、附屬小學校に於て入學試験にテストをなしその一年後の成績順位との相関を私が調べた結果は相関係數〇・六となり、翌年即ち八年入學者に就て一年後の成績順位との相関係數を調査したるに〇・七四なる結果を得た、之等の係數を見ると學科による入學試験の係數よりも遙かに高く、前述せる「H」を出すも後者と異なり密接なる關係あることは明らかである。

以上の比較に依つて如何にメンタルテストの信頼すべきものであり、學科試験の撰抜方法として不適當であつたかを讀者は明らかにせられたことと思ふ。(未完)

○會 告

●本會幹事阪内みち子君は、今回御都合によつて東京女子高等師範學校保母兼教諭の職を辭されました。本會幹事としては引つゞき御盡力下さることになつて居ります。従つて、本會事務に關する當務幹事としては、便宜上、同附屬幼稚園保母及川ふみ子君に願ふことになりました。御報告申上げます。

○文部省保母講習

本年も、文部省主催の保母講習會が、東京女子高等師範學校内に於て開催さるゝ筈に聞きます。詳しいことは、まだ發表になりませんが、期日は七月廿七日からといふことです。いづれ確て後發表せられませう。

○「幼兒に聽かせるお話」出版

長く絶版になつて居た、本會編の「幼兒に聽かせるお話」が、新たに増補改訂せられて出版せられました。新しいお話も増加せられ、美しい挿繪も新たにせられ、殊に、小學校の子どもにも讀めるために、振假名つきになりました。詳細は日本橋區大傳馬町一丁目内田老鶴園にお問ひ合せ下さい。

此の春

—お茶の水へ歸りて—

倉橋生

○建ものは人の手で出来る。自然は、なか／＼そういかない。われ／＼の幼稚園の復興にも、これが容易なことではない。なにしろ焦土の跡、焼け砂の上だ。春が来たとして、空の色、風の軟かさに春が来たとして、此のみぢめな土に春は來ない。折角この春の雨さへ、たゞ、ぬかるみと、水溜りをつくるに過ぎない。

○此の不満足を胸にもつものは私達ばかりではなかつた。いゝえ、私達よりも、さぞかし、もつと不満足なのは子ども達であらう。私達の子ども等の中には、丁度去年の春に初めてこゝに來て、青々とした草や、愛らしい草花に、楽しい幼稚園といふものを見出したものが澤山居る。それが、此の春は……、と思ふだけでもつらい。

○子ども達の不満足は、——お部屋で、繪本で、玩具で、

お話で、唱歌で、それだけでは充たされない不満足は——保護者諸君の胸にもあつた。そして、藤棚がもち込まれた。花壇がもち込まれた。築山がもち込まれた。植込みがもち込まれた。黄ろい花が咲いた。紅い花が咲いた。白い花が咲いた。

○よろこんだものは私達子ども達ばかりではない。うれしそうな春風が、之れ等のともだちを訪ねに來た。『まあこれで春風にも申譯が立つ。』或は或る日、こんなことを獨りで言つて見たりした。

○しかし、春がだん／＼更けて來ると、私達は再び、例の誰れにでもある淡い暮春の回想といふものに捕へられた。といふと如何にも風流人の様だが、そんな譯ではない。たゞ、あの、花の時よりも勝れて嬉しかつた此の幼稚園の庭の、去年までの青葉を思ひ出したのである。ほんとうに此の幼稚園の庭は、古い大きい木の多い庭であつた。その一本々々が、長い枝を擴げ、廣い葉を擴げて、全園を綠に包んだものであつた。時には、息苦しくなる程に、綠の濃い庭であつた。それが今無い。何んにもない。一本もない。

鬼 さ ん

土川五郎振付

□ 歌 詞

一、鬼さん こちら

手のなる方へ

あちらでたたた

こちらでたたた

二、つかまへられた

人こそ鬼よ

あちらでたたた

こちらでたたた

□遊 戯

一、鬼さんこちら……圓心に向ひ前進すること四歩
 手のなる方へ……上體をや、前方に屈して四回拍手しつゝ、右足より

四歩後退す

あちらで……左向駈走して直に背面を向き

ななた……上體を前に屈して三回拍手す

こちらで……駈走にて最後に背面を向く

たたた……前に同じ

二、つかまへられた……又圓心に向ひ前進四歩

人こそ鬼よ……四回拍手しつゝ後退す

あちらで……又左向き駈走最後に背面に向く

たたた……上體を前に屈して三回拍手

こちらで……前に駈走最後に背面を向く

たたた……前に同じ

鬼さん

3	2	1	6	5	5	5	0
テ	ノ	ン	ル	ホ	ウ	ヘ	
ヒ	ト	ヘ	ソ	ホ	ヒ	ホ	
2	2	2	2	1	1	1	0
コ	チ	タ	テ	タ	タ	タ	
コ	チ	タ	テ	タ	タ	タ	
2	3	3	2	1	1	1	0
コ	チ	タ	テ	タ	タ	タ	
2	3	3	2	1	1	1	0
コ	チ	タ	テ	タ	タ	タ	

4/4
 八調

とほせんほ

□ 歌 詞

赤い赤い鳳仙花

白い白い鳳仙花

その中くぐつて

通りやんせ

赤い花ちるよ

白い花ちるよ

いや／＼おまへは

通しやせぬ

□遊 戯

赤い赤い鳳仙花……二列圓形に手をつなぎ左に七歩

白い白い鳳仙花……右に七歩

其の中くぐつて……後列生は手をつなぎたる前列生の左方よりくぐつて内

方に入る

通りやんせ……前の後列生は前列生なりて手をつなぎ足踏す

あ……両手を斜右上にあけ

かい……両手を左下に流す

花ちるよ……両手を頭上にあけ掌を前方又は後方に向くる如く手頭を回は

しつゝ兩側に下ろす

い……両手を斜左上にあけ

ろい……右下に流す

花ちるよ……前に同じ

いやいや……前後列共手を取りて左へ一步

おまへは……右へ一步

通しやせぬ……前列生は左足一步左へ 右足一步右へ「ぬ」にて繋ぎたる

手を頭上にあぐ

後列は斜左へ三步前列の方に近寄り「ぬ」にて前列の左手の下より内

方へ頭を下れて顔を出す

ほろほろ螢より

北原白秋作歌 弘田龍太郎作曲

とほせんほ

2/4 二調

5	5	4	5	5	4	5	5	5	2	0
ア	カ	イ	ア	カ	イ	ホ	セ	ン	ク	ワ
5	5	4	5	5	4	5	5	5	2	0
シ	ロ	イ	シ	ロ	イ	ホ	セ	ン	ク	ワ
5	5	5	4	5	5	5	5	5	2	0
ソ	ノ	ナ	カ	ク	ク	ツ	テ	ト	セ	セ
1	—	2	3	5	4	3	4	5	0	1
ア	ワ	カ	イ	ハ	ナ	テ	ル	ヨ	シ	—
5	6	5	3	5	5	5	4	5	5	5
ハ	ナ	チ	ル	ヨ	イ	チ	ヤ	マ	ハ	セ
			0							2
										0
										2
										0
										2
										0
										2
										0

お春

東京女子高等師範學校教授 岡田美津

九 白雪と紅薔薇

十一月の末、感謝祭も間近くなつた頃、下山一家の生計がいよゝ／＼行き詰りといふ所まで來た。さしも貧窮と、きはよい不安の中に、生れ育つた連中でも、二進も三進も行かなくなつたのである。

河崎村の人達は、下山一家の者を、その生國へ歸さうと努めた。子供達が、どうにか、獨立するやうになるまでの世話、生れた土地がすべきで、移住して來た村の責任ではない、といふのであつた。下山のおかみさんは、それでも、力一杯働くのだが、家内には食物もあまりないし、着るものなどは、尙更、無かつた。それで、子供達は、食事時になるこゝ、近所の家の勝手口の外に、大人しく腰を下ろして、食欲を充たさうとした。一體が、あまりに人に可愛がられない子供達なのだが、それでも、親切氣のあるおかみさん達から、不用の食物を貰つたりした。

十一月になつて、天氣は寒く陰氣になるし、近所の家では、感謝祭の御馳走に使ふ七面鳥が肥え太り、南瓜や玉黍蜀が納屋に入つて居るのを見ては、下山の子供達も、自分等が身の上をつく／＼味氣なく思つて、何か、金のかゝらぬ面白い事はないかを探しまはつた末、石鹼を賣つて賞品を貰ふ事を思ひ立つた。實は、此夏の末に、近所の人々に少しばかり賣つて、玩具みたやうな手押し車を一つ會社から手に入れたのであつた。

その車は、可なり「やにつこい」代物だったが、田舎道を押して行けない事もなかつた。子供達は、親譲りであらうか、商賣にかけては抜目がなくて、こんどは、その手車を利用して、石鹼販賣の範圍を廣め、近くの村々へまで行つて見やうとするのだつた。石鹼會社は全國に居る幼年賣子には、極少しの利金しか呉れない金だが、相當の數を賣つたものに贈呈するといふ品物を、美しい挿繪入りにして廣告して居るので、下山の子供達は、すつかり乗氣になつてしまつた。そして下山のお倉とすうちやんとが、お春のところへ相談に行つたため、お春までが一も二も、なくそれに大賛成をしてしまつて、自分はもとより、金子しまさんもきつこ手傳ふと約束した。

さて、その賞品の中で、手に入りさうなのが三種あつた。本箱ミブラン天の寢椅子と、置ランプとなのだが、下山家には書物は一冊もないし、それから椅子なんかは不要と子供達はさつさと定めてしまつて（七人も家族があるのだから、役に立ちさうにも思へるのに）唯もう置ランプを何よりもよくて食物よりも着物よりも欲しいものにしてしまつた。お春にしろ、おしまにしろ、下山の者が置ランプを欲しがるのが不似合だとも考へなかつた。そして二人で、置ランプの挿繪を眺めては、もし自分が獨立で賣子になるなら、どのやうにでも骨を折つて、石鹼を賣りに賣つて、そのランプを賞品に取り、此冬は、その光の下でくらせると考へたりした。廣告の文で見ると、高さが八尺程に思はれるので、おしまは、お倉に山の家の天井の高さを測つて見たらよからうといつた。しかし但し書の中に、相當の臺（定價三圓）の上に載せると、高さが二尺五寸としてあつた。ピカ／＼の眞鍮製であるが、純金と見まがはれる事請合で、それに附屬してゐる傘（石鹼を更に百個賣り上げた場合に進呈）は、縮緬紙で出來てゐて、色彩は十二種もあるから、貰ふ人は、好みの色を選びうると書いてあつた。

下山のシーソーは、この組合に加入してゐなかつた。お倉は、割合によく賣つたが、舌たらずのすうちやんは、大した儲をし得なかつた。それから、双生児の兄弟は、手離しには出されぬ程年が行かないので、六個位、もたせて、おまけに、

一箱いくら、一ダースいくら、一個いくらと、値段付を添へてやらなければならなかつた。お春と、おしまは、二人で、どこかの方面へ二三哩出ていつて、白雪石鹼と紅蕃薇石鹼との賣れ口がどんなものか試めして見やうといつた。白雪は、洗濯用ので、紅蕃薇は化粧用のであつた。

二人はいそぐと出掛ける準備にかゝり、おしまの家の、屋根裏の室で、長い相談をした。賣へてあるく言句を定めるのに、會社の廣告を参考にしたが、それよりもつこ助けになつたのは富田町の市場で、藥賣りの言ひ立て、ゐた文句を、記憶してゐた事だつた。その男のやり振りは、一度見たら忘れられるものではなかつた。おしまがお春を御客に見立て、言つて見、お春は、おしまに向つて言つて見た。

「今日は、石鹼の御入用はございますまいか。白雪と申すのと、紅蕃薇と申すのとで、飾り函に六個人つて、白雪の方がたつた二十錢、紅の方が二十五錢。成分にはすこしも混りものなし。もし御好みなら、御病人が御召し上つても、美味しくて御ためになります。」

「一寸お春さん。それをいはない事にしませうよ。なんだか馬鹿みたやうな氣がするわ。」と、おしまは葉々しく遮つた。

「なんでもない事で、あなたは、ぢきに、馬鹿見たやうな氣がするのね。だから、私、時々、あなたは、ほんとの馬鹿なのかと思ふわ。私や、そんなに安つほく馬鹿見たやうな氣にならない。ぢや、厭ならその食べてもいゝつてとこは止してその先を御言ひなさいよ。」とお春は、たしなめた。

「白雪は、極上の洗濯石鹼で、これに越す品は無からうと存じます。御召物を、水に浸けて、一番汚れたところへ、この石鹼をかるく塗つて、朝から夕方まで、水に浸けたまゝにしてお置きになるとどんな赤ちやんでも、造作なく、お洗濯が出来ます。」

「赤ちやんでないのよ。赤子なの。」と、お春は、廣告を参照しながらいふ。

「どつちだつて同じよ。」と、おしまが辯じた。

「それや同じ事だけれど、赤ン坊の事は、廣告なんかでは、幼児ミか赤子とかいふのよ。詩にかく時だつてそうよ。あなたも幼児つていふ方が好き？」

「いゝえ。幼児なんて猶いやだ。だがね、お春さん、廣告の通りに一度して見た方がよくはない。下山の生兒に洗濯させて見ませうか。」

「一體、赤子が、どんな石鹼を使つたつて、お洗濯なんか出来るものぢやないわ。だけど、ほんとでなくちやかうやつてこうに書き立てる譯がないから、私達そんな心配はしないで置ませう。まあ、面白いわね！ 私を知らないごこの家へ行つて……私怖くはないから……この長文句を述べ立てるのよ……病人の事も……赤子の事もみんな。」

以上の談話は、ある金曜日の午後、金子おしまの家で交はされたのである。お春の伯母達が、舊友の葬式に列するために遠いところへ出かけたので、お春は、三日間おしまの家へ泊りに来て居たので、この子の喜びは限りを知らぬ程だつた。

土曜日が丁度休み日にあたつたので、二人は、老いた馬をつけた馬車を驅つて、三哩先の北河崎村へゆき、おしまの親戚のところで中食をして、四時にはキッチンと歸つてくるといふ豫定だつた。

二人で、金子のおかみさんに、北河崎への行き歸りに、四五軒の家へ寄つて、下山家のために、石鹼を賣つて来てもらつてかき訊いたとき、おかみさんは、初めのうちは、さうしても不可いけなといつてゐた。しかし子供には甘い親なので、おしまが、そんな珍らしい事をして遊ぶのに、何の異存もなかつたのだが、さうだかど危ぶんだのは、氣むづかしいおみね伯母さんの姪のお春のためだつた。しかし、その催しは、慈善のためなのだといふ事が解つたので、やつと同意してくれた。

二人の少女は、雜貨店へいつて、石蔵の大箱をいくつか、下山のお倉の支拂ひにして、借り受けた、それから、その代物を、馬車の後部に載せて、嬉々として、二人は、田舎道を急いだ。晴れ渡つた秋日和で、感謝祭が間近にせまつて居るなどとは思はれなかつた。ガサ／＼と風の鳴る日であり、紅に褐に、黄に赤に、青に深紅の日であつた。樹にも楓にもまだ葉が残つてゐて、緋と褐と黄金との錦を織つてゐた。空氣は、きび／＼と肌觸りよく、野といふ野には、黄色く赤く林檎が山をなして、納屋、醸造所、市場へと運ばれるばかりになつてゐた。馬車を曳いてゐる老馬も、二十歳といふ年を忘れて、匂よい空氣を吸ひ、子馬のやうに走つた。山は遠くに、碧く、くつきりと見えてゐた。お春は、馬車の中に立ち上り、生の悦びに堪えられなくなつて、目前の景色に呼びかけた。

大きく廣く美しく莊大な地よ、

御前のぐるりには漫々と水がとりまいてゐる、

御前の胸にはすく／＼草が生ひ茂つてゐる、

地よ、御前は、美しく装つてゐる。

華麗な木の葉が一片、馬車の中に舞ひ込んだ。

「色を見て眼が眩みさうになる事があつて？」と、お春が尋ねた。

おしまは、長く黙つてゐた揚句に、

「いゝえ。そんな事ないわ。ちつとも。」

「眼が眩むつていふのは、言ひ方がわるいかも知れない。でもまあ、そつといふよりは任方がない。私、色を食べたり、飲んだり、そんな中に寝たいとさへ思ふわ。もし、あなた樹になれたら、何の樹になる。」

おしまは、こつといふ風の問答には、大分馴れて來た。お春の御蔭で、おしまは、耳が明き、眼が見え、舌が動くやうに

なつたので、今の間に對しても、とにかく、應答が出来るやうになつた。

「私、花盛りの林檎の樹になる。うちの豚小屋の傍にある、うす桃色に咲くあの樹よ。」

お春は笑ひ出した。……おしまの返答は、いつも案外であつたから。

「私なら、そら、あそこの池の縁よちにある、眞紅の楓になるわ。」といつて、お春は鞭で指した。「豚小屋のそばの林檎の樹よりも、餘計にもが見えるわけでしょ。林が見渡されるし、美しい姿見で、紅い自分の着物が見えるし、水の中に倒に生えてる黄や茶色の樹だつても見えるしね、私大きくなつて、御金が取れるやうになつたら、此の葉のやうな着物を拵らへるのよ。ルビー色の地薄のね、裾を長く曳く、へりの飾りのヒラ／＼ついでるのを。それに、樹の幹のやうな褐色の帯をして。だが、どこかに縁をいれなくては。緑りの下ばきツてあるかしら。下からチラ／＼、緑りの下ばきが出るやうにして、眞紅の楓になる前に葉の色が緑だつたといふ事を分らせるの。」

「そんなの平凡だわ。私はね、白い襦子の着物に桃色の帯、桃色の靴下。青黒色の靴。それにキラ／＼金物飾りのついた御扇子を持つのよ。」（以下次號）

編輯だより

○前號の本誌が、久し振りで（譯に相濟まない譯ですが）發刊せられた時、ある讀者の方は、「歸つて來たれ」といつて迎えて來さいました。「なか／＼可愛らしくなつて歸つて來たれ」といつても下さつた。

○ある讀者の方は、「可愛らしいが、可愛らし過ぎるね」といつた方もありました。「もつと頁數の多い、内容の多いものにならなければいけないね」とも附け加へられました。

○本誌は、今出來るだけの努力をして居ます。どうか、皆さんの御同情によつて、少しでもいいものにし度いと思つて居ます。形でなしに、中味を、量でなしに、質を。本誌にあらはれた、其の小さい努力の一端をおくみ下さい。

○併し、われ／＼の力だけでは到底何も出來ません。どうぞ皆さんのいゝ／＼の御援助を乞ひます。

讀者の方からの御寄稿を下さるることによつて。

讀者の方々に新らしい讀者を紹介して下さいることによつて。

いゝ／＼の御注意が教へて下さることによつて。

御注意	廣告料	定價表		冊數	定價	郵稅
		一冊	六冊(前金)			
△本誌購讀御希望の方は定價表により振替貯金で御送金下さい(東京四六堂發售教文書院宛) △前金切れの節は帶紙に「前金切」と致します。 △郵券送金の節は一割増で一錢切手に願ひます。 △本誌の一切は教文書院宛御照會下さい。	普通面一頁	金四拾五圓	同	同	同	同
	表紙裏附	金七拾圓	同	同	同	同
	表紙前付	金七拾圓	同	同	同	同
	表紙裏附	金七拾圓	同	同	同	同
	六冊(前金)	金貳圓拾錢	同	同	同	同
	十二冊(前金)	金四圓貳拾錢	同	同	同	同
	一冊	金參拾五錢	同	同	同	同

大正十三年四月二十八日納本
大正十三年五月一日發行
第二十四卷第二號

無斷 轉載 禁止

編輯者 東京女子高等師範學校内日本幼稚園協會
倉橋 惣三
發行者 東京市下谷區上根岸八十八
越元 新吉
東京市小石川戸崎町七二
印刷者 沖田 瀧次郎
印刷所 教文書院印刷部

東京上野公園寛永寺坂下(上根岸八十八)

發行所 教文書院

電話下谷三〇四七番・一九五一番
振替東京四六一一一番

第二十四卷第二號(每月一回一日發行)

大正十三年四月廿八日印刷
大正十三年五月一日發行

定價金三十五錢

院書文教